

## PCL 不全膝に新たに ACL 損傷をきたしたラグビー選手の 2 例

○佐々木 謙 (ささき けん) (MD), 山口 基 (MD), 下奥 靖 (MD), 高木 陽平 (MD),  
有田 親史 (MD)

明和病院 整形外科

### 【目的】

我々は PCL 不全膝に新たに ACL 損傷をきたしたラグビー選手に対し手術加療を行ったので報告する。

### 【対象】

27 歳・28 歳の男性 2 症例。PCL 不全膝の状態で社会人ラグビーリーグ選手として活躍していた。共にラグビープレー中に同側の ACL 損傷を受傷し、当院にて ACL・PCL 再建術を施行した。

### 【結果】

MRI 上では ACL・PCL ともに断裂所見を認めた。2 症例ともに ACL は半腱様筋を半切し double-bundle で再建、PCL は健側の半腱様筋を用いて 4 重とし single-bundle で再建した。術後リハビリは当院での PCL protocol に従った。1 名は術後 8 ヶ月でラグビーに復帰し、1 名は現在術後 6 ヶ月で復帰に向けてリハビリ加療中である。復帰時 Lachman 陰性、posterior drawer test 陽性 grade 2 であった。

### 【考察】

PCL 断裂はラグビー等のコンタクトスポーツでよく生じることが知られており、後方動揺性が存在しても動的機能で適切に代償出来れば、保存的加療にて多くの場合受傷前スポーツ復帰が可能といわれている。しかし PCL 不全膝に ACL 損傷を合併した場合は、再建されない靭帯の機能不全の残存が自覚症状を残すのみでなく、他の再建された靭帯への過負荷と不安定性の再発につながる可能性があり、ACL・PCL 同時再建が必要と考えられる。